

井上靖の『蒼き狼』から読む「狼の原理」

魏 大海

先日、井上靖学会で『蒼き狼』についての発表をした。歴史小説であるかどうかは別として、「蒼き狼」表象について大変興味を感じていたからである。

井上靖のあとがき『『蒼き狼』の周囲』によれば、大学時代に当時のベストセラーである小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』（大正一三年）と同著に対する史学者の反論を載せた「中央史壇」に触れ、戦後には那珂通世訳注『成吉思汗実録』（『元朝秘史』、昭和一八年）を入手し、チンギス・ハーンに関心を持ち、資料を集めて構想を練り始めたという。那珂通世訳注の『成吉思汗実録』にある有高巖の「序」では、次のような内容がある。「元朝に秘蔵されていた特殊の資料で、蒙古の太祖成吉思汗の事蹟を主とし、これに祖先の傳説及び（中略）元蒙古語を禿兀兒字で書いていたのを明初に漢字に書き改めたが、その際まず漢字を音標文字として蒙古語を音の儘に記し、次に各語に漢語の傍訓を施してその意義を示し、別に本文の大意を部分的に漢文に要約せるものを附していたものである。……人名と事実の誤謬が少なくないので、博士は前記の三様の體を具へた『忙豁命紐察脱卜察安』（訳して『蒙古の秘史』）を得て、蒙古語法に基き嚴密に修訂せられたのであり、その内容がわが『古事記』に該當するといふ趣旨から古體の假名交り文に翻訳せられ、これに精緻な注釋を加へて『成吉思汗実録』と名づけ出版されたのである。」

これにより、井上靖が『蒼き狼』を書いた当初の状況を一応想像することができる。那珂通世訳注の本の方が、元々の『元朝秘史』よりも、誤謬が残っていたとしても、信頼性の高い典籍である。しかし、那珂通世訳注の『成吉思汗実録』では、実は狼に関する記述は冒頭のたった一言である。反対に井上靖の小説『蒼き狼』では、題名だけでなく、作品の中に「狼」に関する表現がもの凄く多い。「狼になれ！俺も狼になる！鉄木真は何回も口の中で繰り返した。……狼にならないならなかった。狼には無限の欲望があるはずであった。」……狼たちに見えた。眼は千里の遠くを見透す鋭さと、いかなる物をも自分のものとする強い意志を現わす烈しさをその光の中に持っていた。……攻撃のために作られた体軀は今やみごとに仕上がっていた。艶やかな胴体は美しく引き緊まり、四肢は雪原と強風の中を駆けるために必要な肉だけをつけ、尾は宙間を切る一本の刃となるために充分ふさふさしていた。「上天より命あって生まれた蒼き狼があった。西方の大湖を渡ってきた惨白い牝鹿があった。その二匹の生きものが営盤して生まれたのがモンゴルの祖バタチカンであった。モンゴルは蒼き狼の裔であった。」傍線を引いた表現しか、『元朝秘史』と一致していないようである。

このような「狼」表象が、一体何を意味しているか？詩人である歴史小説家がメタファーあるいは暗喩としたのは、一体何であろうか？井上靖によると、「成吉思汗を書くにしても、一代のうちに欧亚にまたがる大国を建設した英雄の英雄物語を書く気はなかった。また古今未曾有の残虐な侵略者としての成吉思汗の遠征史を書く気もなかった。成吉思汗の一代を書くとなると、すべてそうしたことにも触れなければならないが、しかし、私が成吉思汗について一番書きたいと思ったことは、成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密である。」その「秘密」とはいったい何なのか？作家自身は「狼の原理」の発明こそが、

物語執筆の原動力になったと書いている。それは通常の狼のイメージより複雑で、彼の想像する征服王の行動を説明する格好の隠喩だったらしい。

日本では狼は一般に残虐、凶暴のイメージでのみ語られる。たとえば柳田国男の「日本狼に關する描写」(『遠野物語 山の人生』、岩波書店、一九七六年)をひもとく。ある爺さんが酔っ払って夜道を帰ると、狼の吠える声が聞こえ、夜通し止まなかった。翌朝、厩では七頭の馬が無残に食い殺されていて怖くなったという。別の話では山道で鹿が横腹を食い破られたばかりで、湯気が立っているのを見たという。これはモンゴルの草原狼のイメージとだいぶ違っている。そこでは残虐の他に、勇敢、強靱、専念、孤独、堅忍、団結、叡智などの特性も、狼の世界に關わっている。正しいかどうかは別として、狼の原理は勝利と成功に關わっている。正義や罪悪とも無関係であるように、唯一の目的としては生存なのだ。これはイギリスの動物学者ション・エリスの所論だったと言われている。弱肉強食は自然の鉄則とも言える。狼の原理あるいは法則に則るものでもある。ところで、井上靖が一番関心を持っていたのは「狼」のどのような素質なのか? 「狼」の一般的な素性であるか、あるいは特殊な種類の「狼」なのか? 柳田国男の「日本狼」の記述から感じとられたヒントでもあるが、日本の島国生態の中にいた日本狼が、日本の狭い国土や豊かで美しい自然の中にいた日本狼が、日本人と同じような島国根性みたいなものを備えていたかもしれない。なんとなくこのような「日本狼」が、広大なる蒙古草原の自然環境にいた「草原狼(蒼き狼)」と、絶対的に違う素性の持ち主だったとも推測できるはずだ。井上靖が興味を持っていた狼のイメージは、「日本狼」ではなく、蒙古草原の特別な素質が持たれる「蒼き狼」であっただろう。

「蒼き狼」と同じような草原環境にいた人間——成吉思汗や蒙古民族の人々は、大草原の中

で日々生き抜いていくことで、自然と「蒼き狼」と同じような素質を持つようになったのではないだろうか。こういった仮説が成立するならば、「蒼き狼」が、成吉思汗の一生及び元朝の興亡と密接に関わる表象になってくるであろう。草原狼と、同じような自然環境で養成されたのは、正に神話的狼に似たような性質のあった成吉思汗といった民族英雄であろう。それが「狼性」あるいは「侵略性」も含まれた性質だと言われてもいい。

これは正に井上靖の歴史認識あるいは歴史観に関連していたものであろう。狼だけによって蒙古の英雄である成吉思汗の一生、戦闘の秘密を解明しようとするなら、難しい挑戦だったと思われる。元朝の成功を「狼原理」だけにより解釈しようとするのは大変難しい。その原因は成吉思汗の初期建国の時代の国のシステムとも深く関わっている。一三世紀前後、宋の時代の中国システムは、実は成吉思汗の国より随分進んでいた。紀元前二二一年前後、秦の始皇帝が既に六国を滅ぼし天下を統一した秦の時代は、既に進んだ中央集権制の封建社会に入っていた。中国最初の封建社会が、紀元前四七五年の戦国時代からであった。成吉思汗の最初の蒙古人建国神話の時代に、その国は、まだ完全に奴隸制社会から脱出していない状態であっただろう。ところが、何か非常に複雑な原因で、勿論前述の「蒙古狼」の素性とも密接な関連があつて、ますます強大になり続け、やっとモンゴルを統一するという大業を達成したわけである。

井上靖は小説家であるから、歴史のままに考える必要もなく、その意欲もなかったかもしれない。多分、井上靖が探っていたものは「成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密」でもなかった。では一体何を探っていたのか？井上靖が探っていたのは、成吉思汗と草原狼「蒼き狼」との共通性、成吉思汗といった空前絶後の「狼性」に通じる蒙古民族英雄の魅力あるいは蒙古帝国の強過ぎた戦闘力及び征服ドラマ表象に露呈された自然

生態に関わった「人間性」と動物界の「狼性」との共通点であったのだろう。あの巨大な征服欲の秘密が、すべて「蒼き狼」といった狼性にあるとは、ちょっと考えにくい。この民族英雄の類を見ない無敵の魅力の秘密が、「蒼き狼」表象の中に含まれていたことはありえる。井上靖は、成吉思汗にだけでなく、草原狼「蒼き狼」の持つ、神に似た天性あるいは原理に完全に魅惑されていたのであろう。

(中国社会科学院外国文学研究所教授)